

第 66 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

創価中学校 2年

田中 大護

課題 ③

平和と安全、貧困、気候変動など世界中で様々な課題がある中、国際社会が優先して取り組むべき課題は何か。

副題

「やさしい日本語」～コンビニにて～

本文

③「やさしい日本語」～コンビニにて～

去年の七月、ものすごい夕立が降った日のことだ。部活帰りの私は、濡れた制服のまま駅前のコンビニに駆け込んだ。目的は温かいお茶と、急遽必要になった百円のビニール傘。レジに並ぶと、胸に「研修中」と書かれた名札をつけた外国人の男性店員さんが立っていた。

正直に言うと、私は一瞬「別のレジに並び直そうか」と迷った。英語も話せないし、もし言葉が通じなくて時間がかかったら気まずい、と思ったからだ。でも、後ろに人が並んでしまい、逃げられなくなった。

会計の時、焦って濡れた一円玉を落としてしまった。「あ、すみません」と顔を赤くして拾おうとした私に、その店員さんは落ち着いた声でこう言った。

「ゆっくりで、大丈夫ですよ」

あまりにもハッキリした、丁寧な日本語だった。驚いて顔を上げると、彼は温かいお茶を袋に入れながら「雨、すごいですね。お氣をつけて」と笑顔を見せてくれた。

その瞬間、猛烈に恥ずかしくなった。「外国人だから言葉が通じないはずだ」と勝手に決めつけ、壁を作っていたのは自分の方だったのだ。彼はこの街で暮らし、日本語を学び、こうして接客の仕事をしている。それなのに私は、彼の努力や人柄を見ようとせず、自分の「勝手な苦手意識」で彼を避けていた。

家に帰ってから気になって調べると、「やさしい日本語」という言葉に出会った。難しい単語を使わず、短い文で伝える日本語のことだ。外国人支援というと「英語をペラペラ話すこと」をイメージしがちだが、実はそうではない。相手が理解しやすい言葉を選び、歩み寄ろうとする「姿勢」こそが重要なのだと知った。

それ以来、私はそのコンビニに行くたび、意識して「こんにちは」「ありがとうございます」と声をかけるようにしている。少しゆっくり、はっきりと話す。たったそれだけのことだが、相手も「どうも!」と嬉しそうに返してくれるようになった。ほんの少しの工夫で、人と人との距離はこんなにも縮まる。

「多文化共生」や「国際協力」という言葉は、どこか遠い国の話や政府の仕事のように聞こえる。けれど、本当の第一歩は、自分が暮らす街のレジ前や通学路にあるのだと思う。

外国人という「記号」で人を見るのではなく、同じ街で暮らす「一人の隣人」として向き合うこと。自分から笑顔で挨拶し、小さな壁を壊していくこと。私にとっての国際協力は、まだ始まったばかりだ。